

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第16回 何が起きるか ^{みずのえとら} 壬寅のニッポン

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

新年あけましておめでとうございます。1月も中旬になってしまいましたが、本年初めてのコラムですし、まだ1月中でもありますので、初春のお慶び^{よろこ}を申し上げます。

キリスト教国などでは12月25日のクリスマスと1月の新年を合わせて「Merry Christmas & A Happy New year」などと言って年末年始の行事が一体となっています。また、中国などでは、旧暦に合わせて2月に新しい年を迎えます。そうした中で、現代の日本では太陽暦に合わせて1月1日を「^{がんとん}元旦」と呼んで、家庭ではお屠蘇^{とそ}をお祝いし、年始の挨拶をしたり初詣をしたりして新しい年のスタートを祝うのが恒例となっています。留学生の皆様のご郷のお正月はどのようなしきりがあるのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、1年前は12月31日の大晦日^{おおみそか}から元旦未明にかけての参拝を断った神社も多くありましたが、今回は昨年秋以降、コロナ感染の第5波が沈静化していたこともあり、東京・明治神宮をはじめ、多くの神社などで通常通りの参拝風景が見られました。しかし、参拝者はマスクをつけ、間隔をあけ、新年を祝う酒宴^{しゅえん}を避けるなどの感染対策^{しゅくしゅく}を粛々と行っていました。

各家庭の楽しみの一つに年賀状があります。日本郵便（旧・郵政省）が発行するお年玉付き年賀はがきを使うケースが多くなっていますが、今年用は18億2536万枚が発行され、このうち10億枚余りが元旦に配達されました。一見多い数字のように見えますが、この実績は前年より約6%減でした。最盛期の平成15（2003）年には21億3443万枚だったといいますから、それに比べると3億枚以上も減っています。これは明らかに、電子メールやSNSの普及によるものでしょう。2年以上も続くコロナ禍の中で迎えた2回目の正月であり、急速に伝統文化が失われ、デジタル化が進んでいる証といえます。

その中で私は、東京の伊豆諸島・利島^{いずしょとう としま}の脇の海から昇る日の出を静岡県下田市から昨年末に自分で撮った写真と「謹賀新年」の文字、今年の干支（えと）であるトラと門松の絵を配し、下に趣味で撮っている蒸気機関車の写真を載せた年賀状を作成し、300人余りの方々にお出ししました。そして、その片隅に「令和四年元旦 壬寅」との文字を添えてあります。

中国などから来られている方には釈迦^{しゃか}に説法かも知れませんが、上記の「干支であるトラ」

と「壬寅」の解説を若干したいと思います。

日本で「干支」というと一般には「十二支」を指すことが多いと思います。「私はトラ年生まれで今年は年女」「俺はタツ年だ」などと若い人たちでも普通の会話に出てくると思います。この十二支は、ネズミ、ウシ、トラ、ウサギ、タツ、ヘビ、ウマ、ヒツジ、サル、トリ、イヌ、

イノシシの 12 種類の動物です。文字は順番に、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、

戌、亥が充てられており、毎年順番にその年の支（えと）が巡ってきます。年だけでなく、日にちや時間、方角にも同じようにつけられています。

例えば、「寅年の元旦、卯の刻（午前 6 時頃）に亥の方角（南南東）から陽が昇った」という具合です。お昼の 12 時のことを「正午」というのは、12 時が「午の刻」だから「まさに午の刻」というわけです。

それと共に、「十干」は甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸であり、干を支の前に書きます。

10 の干と 12 の支を順番に並べて書くことで、10 と 12 の最小公倍数で 60 通りの区別ができます。それを「十干十二支」といい、生まれてから 60 年たつと干支が一回りして生まれた年の暦に戻るので、60 歳の人を「還暦」と言うわけです。『三省堂漢和辞典』によると、「還」の文字には「もとにもどる」という意味があります。高校野球や阪神タイガースで有名な「阪神甲子園球場」は、建設された大正 13（1924）年が甲子の年だったので「甲子園（こうしえん）」と命名されました。ただし、「甲乙丙丁…」は訓読みもあり、年や方角を表現する場合は甲子を「きのえね」と読みます。

それでいうと、今年の干支は「壬寅」なので、私は年賀状にその干支を書いたわけです。「みずのえとら」と読みます。干と支はそれぞれ独自の意味を持っています。壬寅の「壬」は「妊娠」の「妊」の一部であることから、「はらむ」とか「うまれる」という意味だという説が多いようです。また、「寅」は動物のトラを指しますが、強いトラや、演劇、演説の「演」の字の一部であることから、「人の前に立つ」などの解釈があるようです。そうしたことから、「壬寅」は、「成長」や「始まり」、「熱意や行動力」と受け取られます。

そういう視点で今年を考えてみると、新型コロナウイルス禍から抜け出し、新しい国造り、社会づくりに邁進する熱意や行動の年にしたいものです。

私の専門の政界に目を向けてみると、昨年はコロナ禍の中で衆議院総選挙が行われましたが、今年は夏に参議院通常選挙が行われます。参議院は 248 議席のうち、1 回の選挙で半数が改選されます。今回は欠員補充 1 議席を含め、125 議席（選挙区 75、比例代表 50）を争う予定の選挙ですが、1 月 10 日付『産経新聞』によると、選挙半年前のこの時点で、171 人がすでに立候補の準備を進めているそうです。

昨年の衆院選挙で勝利した自民党は、この参院選挙で勝てば衆議院を解散しない限り、次の

参議院選挙まで向こう 3 年間は政権を握り続けることができます。今年の選挙で連立与党の公明党と合わせ、57 議席を獲得すれば非改選の 68 議席と合わせて 125 議席となり、参院過半数を制することができ、衆参そろって安定的な国会運営ができることとなります。

そのカギを握るのは、全国で 32 ある 1 人区の動向です。平成元（1989）年の参院選では、当時の日本社会党（現在の社会民主党の前身。以降、社会党とする）を中心とした野党共闘が 1 人区のほとんどで自民党に勝利したため、与党・自民党は大幅に過半数を割り込みました。社会党の土井たか子委員長は「山が動いた」と勝利宣言し、それをきっかけに非自民 8 党派による細川護熙^{ほそかわもりひろ}日本新党代表を首相とする連立政権への流れが始まりました。

今年の選挙で同じようなことが起きるのでしょうか。昨年の衆院選では、全国各地の小選挙区（1 人区）で野党の立憲民主党（以降、立民とする）と日本共産党が候補者調整をして自民党に挑みましたが、その多くが不発に終わりました。皇室の在り方や国防問題で決して政策が合わない立民、共産両党の共闘が野合とみられたとの説もありますし、関西圏などでは、与野党対立の間に立った第 3 極の日本維新の会や国民民主党に議席をさらわれました。今回の参院選でも立民、共産の共闘関係がどうなるのかによって勝敗が左右されるでしょう。

年末年始には、そんな選挙情勢に思いをはせていましたが、世界では、オミクロン株を中心とした新型コロナ感染拡大が止まりません。日本でも年明け以降、新規感染者が急増していますが、その中で、尖閣諸島^{せんかくしよとう}（沖縄県石垣市）周辺では中国公船が連日姿を見せて、時には日本領海に侵入しています。また、台湾への中国の軍事的圧力も連日続いています。ウクライナ国境ではロシア軍が兵力の増強を続けており、北朝鮮はミサイル発射を繰り返しています。

こうした世界情勢の緊迫化が進んでいることに対し、日本の政治は参院選準備、コロナ対策を行いながら対応しなければならない二正面、三正面作戦を強いられています。

新型コロナウイルスの推移や米中対立の行方次第で、来月始まる北京冬季オリンピック・パラリンピックがどういう展開になるかわかりません。また、オミクロン株の流行がコロナ禍をさらに深刻にするのかパンデミック収束のきっかけになるのかはまだわかりませんが、コロナ禍、軍事情勢、米中対立の中、令和 4（2022）年の日本の行方をしっかりと見ていく必要があるでしょう。

壬寅の「熱意や行動力」にあやかり、いい年にしたいものです。